

2009年度第2回物学研究会レポート

「走りながら考え続けたこと」

浅野史郎 氏

(慶応義塾大学教授、前宮城県知事)

2009年5月20日



BUTSU GAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

5月の物学研究会では、行政官、県知事として政治や行政の現場を経験され、今後の日本の政治や社会システムの課題を知り尽くし、現在は大学教授として教鞭をとっていらっしゃる浅野史郎さんを講師にお迎えしました。

テーマは「走りながら考え続けたこと」。総選挙が間近に迫る中、日本の政治や行政のあり方を問い直す手がかりをいただけそうです。以下、講演のサマリーです。

「走りながら考え続けたこと」

浅野史郎 氏

(慶応義塾大学教授、前宮城県知事)



01 ; 浅野史郎 氏

●役人から知事へ

浅野史郎です。今日は私が宮城県知事時代のお話しをしようと思いますが、どちらかというとも明るい話題というよりも暗い話といえますか、不祥事やスキャンダルについてが多いです。「今度の解散はいつですか」とか「総選挙では、自民、民主のどちらが勝つんですか」といったテーマは、実は答えは知っていますので、質疑応答の時間に質問が出ればお答えしたいと思います。

さて、私の経歴ですが、1970年に厚生省に入って23年7カ月勤めました。今は役人になってよかったなあ、特に1987年9月末～1989年6月末までのたった1年7カ月でしたが、厚生省児童家庭局障害福祉課長時代には「何かに出会った」という感じがしています。仕事も仲間も楽しかったし、これがきっかけで「障害福祉」は、私の生涯の仕事になりました。

この頃、私は「something everything」を信条に仕事をしていました。役所では課長の時代はすごくいい。例えば、障害福祉課長は障害福祉というsomethingについて深く関わる事が出来る。実際私も障害福祉について日本で一番知っているという自信を自負していたし、何でもやれるという意味でやりがいがあったので、仕事には何の不満もありませんでした。

ところが、1993年9月末にとんでもない報が飛び込んで来ました。本間俊太郎さんという当時の現職宮城県知事がゼネコン汚職で逮捕されて、出直し選挙が行われることになったというのです。そして、突然、宮城県から、ある方が私に会いに来ました。彼は、選挙の裏も表も知っているという、政治の世界での長いキャリアの持ち主でした。そんな人物が生活衛生局企画課長をやっていた私のところに来て、「今度の出直し選挙に出馬しませんか」と言うんです。

私がつっさに思ったのは「お金がかかる」ということでした。その頃の私は公務員住宅に住んでいて、2人の娘も学校に行っていたし、貯金はゼロ。知事選挙の費用は億という単位でかかると聞いていたので、いったいどうやってその資金を作るのか。私は彼に質問したんです。そしたら、いわゆる「〇〇業者という人たちがお膳立てしてくれるというもんだ」ということらしい。とっさに恐いなあと感じたものです。なぜなら、私は選挙について素人なわけですから、彼らのような人たちから、「〇〇業者から用立ててもらもんだ」「〇〇業者が準備してくれるというもんだ」というような、悪しき慣習や常識を吹き込まれてしまう恐れがある。こういう時によく使う語尾が「…というもんだ」だったので、私はこうした世界に居る人たちを「もんだの人々」と名づけました。私は、この話を聞いて、「巻き込まれたらとんでもないことになる」と、ずうっと逃げ回っていました。そして彼が諦めかけた頃を見計らって、「出ます」と宣言したのです。

当初、後任として有望視されていたのは副知事だった八木功さん。当時の社会党と民社党、さらに自民党も乗って、宮城県経済界も八木さんで行こうという感じでした。けれども現職知事が汚職で捕まったのに、そのまま副知事が次期知事に納まれば、宮城県にとって恥の上塗りだし、民意も許さないという動きも一方にはあった。僕自身は郷土愛というよりも、そんな選挙のあり方に対する怒りが出馬決意の後押しをしてくれたわけです。

1993年11月4日が出直し知事選挙の告示日。私は11月1日に当時の大内啓伍厚生大臣に辞表を出しました。出馬決断を下す前後には、いろんな人から意見をもらいました。宮城県在住のある大先輩からは、「君が出る今回の選挙は、野球の試合でいえば20対0で負けている試合の9回裏、2アウト、ランナーなしのバッターといった感じだぞ」と。要は勝ち目なしということですね。

もう1つ、出馬には大きな関門がありました。妻の説得です。妻の同意がなければ選挙は戦えませんから…。私もまず妻を説得せねばと、朝起きて最初に妻に自分の決意を表明し、一生懸命誠意を込めて話しました。そしたら妻は意外とあっさりと納得してくれました。そして最初に言ったことは「パーマ屋に行なきゃ」。頭の切りかえがすごい。もう自分は選挙の応援に行く気になっているわけですから…。

厚生省を退社後、新橋の第一ホテルに選挙の参謀本部を置きました。そして、当時社会保険庁長官で、後に最高裁の判事になった横尾和子さんにご挨拶の電話をしたんです。さんざん「勝ち目はないぞ」とか「どうして出馬なんかするんだ」と言われて落ち込んでいたところに、彼女は開口一番「おめでとう！ 実はね、浅野さんが宮城県知事選挙に出るかもしれないということは役所の中で聞いていた。私はぜひ出てほしかったけれど、口に出しては言えなかったのだから心の中に抑えていたの。決断したんですね」と言ってくれたんですよ。期待もしてなかった言葉だったので、もう滂沱として涙が流れてとまらなかった。「ありがとうございます」と言うしかなかった。それから5分後ぐらいに、「渡部恒三です。出るってか。今までにないような選挙をやれば、これは勝てるからな」と電話を下さった。またうれしくなっちゃって…。こういう体験をすると、精神的には「選挙に出るまでが8割だな」と感じます。

結局、私が29万票、八木さんが21万票、大差で勝ちました。選挙が終わって2週間ほどたった頃、第3の先輩とも言える人が私のところに来て「浅野君、あの選挙はだれが出ても勝てたんだよな」と言ったんです。不思議なことに、私は「このやろう！」とは思わなかった。彼が言ったことはたぶん本当だと思ったのです。たぶん、宮城県民は「知事が汚職でやめるなんて恥ずかしいことは二度と御免だ」と心底感じていて、その思いを私に託してくれたんです。

つまりは、政治と金の問題です。特に私の場合は、このような経緯があったので政治と金の問題にはすごく神経を使いました。私が選挙に勝利した理由は、高い正義感や倫理観ではなかった。では何か？ それは「選挙の在り様が、その後の知事の在り様を決定づける」と言うことだったと思います。しかしその賞味期限は4年、次の選挙までです。

●不祥事勃発

さて、こうして知事の座に着いたわけですが、以下では私の在任中に起こった不祥事についてお話しします。

私は、政治と金の問題の反省から知事になりましたが、残念ながら在任中に不祥事が勃発しました。いや、ばれたと言ったほうがよいかもしれない。私なりの表現をすると、不祥事やスキャンダルは「におい」です。組織内の不祥事は、その組織にとってよくないことですからどうしても隠蔽しようとする動きが出て来ます。しかし「におい」は、隠していてもどこからかプーンと漏れてくる。

私の場合のにおいは、食糧費とカラ出張でした。例えば食糧費です。通常、食糧費というと、〇〇審議会を開催するときの委員のコーヒー代や残業した職員の弁当代のことですが、当時食糧費の大半は官官接待に使われていました。例えば、県庁職員が厚生省の局長さんや課長さんが宮城県に来られたときには、県職員は彼らを料亭「***」にご招待して、コンパニオンも入れて派手な接待を行うわけです。その原資が食糧費です。

ある時、仙台市民オンブズマンが1990年にできた宮城県の情報公開条例を使って、食糧費の情報開示請求をしてきた。条例上の情報開示請求なので、県としては1993年度の宮城県総務部財政課の食糧費執行予算を開示したわけです。全部で78件ありました。ところがそのうち56件は、決済日が1994年5月16日。同じ日で同じ筆跡というおかしな書類だった。これはつまり官官接待ということ。詳細はプライバシーに触れると言うことで、出席者や料亭名は黒く塗りつぶされている。消されていないのは、「請求書」という部分、参加者数の5名、それから日本酒68本、ビール48本、ワイン10本、焼酎5本なんてとんでもない数字が記載されている。これを見て、当然ですが私も仙台市民オンブズマンも「荒唐無稽」と思わずにはいられなかった。実は、この摩訶不思議な請求書の裏には、カラ懇談会という仕掛けがあったのです。水増しされた予算は裏金になったと言うわけです。

情報公開のお陰で、この仕掛けが分かってしまったから大変なことになった。もちろん私は全庁調査を命じました。それも口頭ではうやむやになってしまうので、職員を集めてきちんと書類にして提示しました。そして最後に「おい、ちゃんとやらなかったら首だぞ」と念をおしたんです。実は職員にすれば「クビだぞ」といわれたほうが救いです。なぜなら、調査を進めていく上、彼らもいろいろな人間関係や事情が絡んでいきますから、「ちゃんとやらないと、知事からクビだっていわれているんだよ」と言いう口実が必要なのです。

さて食糧費事件ですが、マスコミなどの会見のときには「不適切な事務処理」と表現していました。そんな時、NHKの「週刊子どもニュース」から取材を申し込まれ、当時中学2年生のチナツちゃんという子ども記者さんが番組ディレクターとインタビューに来ました。事前に小学校5年生が理解できるように回答してほしいと言われていたのですが、案の定、チナツちゃんから「不適切な事務処理ってなんですか？」と聞かれて、つい「書類に嘘を書いたの」と答えてしまったわけです。こんな言葉を発した自分に驚きましたが、本音を聞きだすという点では、一般の記者よりもチナツちゃんの方がよほど優秀だったというわけですね。

こんな経緯もあって、この件に関しては私も職員も腹をくくって全庁調査にあたりました。最終的には8億8,000万円という金額があぶりだされた。私はそれを77カ月かけて県に返すことにしました。まず共済組合が8億8,000万円をどんと返して、今度はその共済組合に管理職手当の何%かを少しずつ返していくというリレー方式。だから当時、宮城県で課長になったというと、「おめでとう、でも大変だな」って両方でした。何よりも重要なのは、職員の奥さん方が給与明細を見て「不祥事の補填のために、先月より2,500円少ない」と確認することでした。このように情報公開を徹底することで、「逃げない、隠さない、ごまかさない」を貫く。私の知事時代、全国市民オンブズマン連絡会議が毎年実施する「情報開示度ランキング調査」では、11回の内9回は第1位、2位と4位が各に2回という評価を受けました。そして宮城県の情報公開のキャッチフレーズは「逃げない、隠さない、ごまかさない」。不祥事発生は普通「逃げよう、隠そう、ごまかそう」ですから、その逆を目指したのです。

「情報開示」というと、正義や倫理で語られます、要は「システム」の問題なんだと思います。システムによって、人の行動が変わってくる。「情報公開は転ばぬ先の杖、情報公開は組織を救う」なのです。ところが、情報公開と紛らわしいのが「広報」です。普通、あなたの会社の情報公開は？と聞かれると、「うちはしっかりやっています。社内便りとか、プレスリリースを1カ月に1回きちんと出していますよ」なんてお答えになる。でもそれは違います。例えば、神田うのさんの結婚式です。自分でデザインした衣装やジュエリーを身に着けた披露宴は広報で、嘘ではないけど都合のいいことしか伝えない。一方、情報公開は、ありのまま、ときには恥部も含めて全部公開することです。

●知事の仕事

先ほど、役所の課長職は「something everything」と言いました。知事の仕事は逆で「Everything something」です。日本語でいうと「広く浅く」。要は何でもちょっとずつすることです。

知事の日常は本当に忙しい。お声がかかれば「はいはいはい」とさまざまな場所に出向いて挨拶をする、また別のところではスピーチする、そんなことが仕事の3分の1くらい。知事室にいても、表敬訪問などで時間がとられます。訪問者にとっては「いや、ほんの3分」、「5分ですから」と言っても、10人来ちゃったらそれだけで大変なわけですよ。そして残り僅かな時間をやりくりして、百何十もある県庁の部局の懸案や案件を検討する。ところが部局の職員と知事とでは、情報量において圧倒的に差があります。彼らは、複数の職員がその案件だけに取り組んでいます。知事はそうはいきません。その上、彼らは知事に対して決してウソは言わないけど、あらかじめシナリオをつくって、伝

える情報を巧みに取捨選択し、知事にはそのシナリオ通りに「うん」と言わせたい。私は、こんなやり方は危ういぞと2期目になって気がついた。そこで5人の職員から成る「政策調整官室」という組織をつくって、事前に各部門が知事に説明したいとってきている案件をリサーチさせて、客観的な情報として私に報告し、私自身が予習できる体制を整えました。こうして、相手のシナリオ通りに「うん」とは言わない、その後のフォローも徹底したのです。官に限りませんが、昔から職員やスタッフが上司に対抗する唯一の術は「サボタージュ」です。聞かないとか、忘れたふりをするわけです。政策調整官が私の目、耳、口、手、足となり、さまざまなフォローしてくれました。しかし最終判断を下すのは、私。私が「頭」なのです。

今、私は知事をやめてよかったと思っています。私が現職の頃は、改革派と言われる知事が数人いて全国的にも注目されました。ところが今改革派知事と言えば、大阪の橋下知事と宮崎県の東国原知事くらいしかいないのではないかと。職員たちは彼らの本気度をいつも上目遣いで見ているんですよ。そして自分らの身の処し方を考える。例えば「裏金作り」なんかも、本当のところだれもやりたくはないんです。でも「…な**もんだ**」って感じで、やっている。だから、知事が本気でこうしたことを正そうとするなら、「みんなで渡れば怖くない」とばかりにやるんですね。

知事には二面性があります。ひとつは、宮城県庁という組織のトップ。もうひとつは、選挙で宮城県民に選ばれて送り込まれた存在という側面。日常的はこの二面性を意識することはほとんどありませんが、一度不祥事が起きると感じずにはいられない。不祥事は、どこかに何かデキモノができていような「違和感」から始まりますが、ほっておくと毒が全身に回って死んでしまう。そんなことにならない内に、知事は県民から県庁に送り込まれた存在であることを認識して、組織と戦っていかなければならない。

では、知事の本来の権力と特権とは何か。それは入札幹旋などではありません。知事の究極の権力とは「人事権」です。知事の任期は最低でも4年。職員の名前と顔、仕事振りはきちんと理解できますから、実質的で有効な人事権を発揮することが出来ます。ですから職員からすれば知事存在はすごく大きい。多少変な知事でも表面上は言うことを聞きます。

…ということで、私は宮城県知事を3期12年勤め、4年前に辞めました。中には4期、5期とやる知事もいます。しかし私は「権力は、腐敗するとはいわないけれども陳腐化する」と考えていました。3期目あたりのとき、友人の残間里江子さんが「もしあなたが、墓碑銘の一番上に『元宮城県知事』と載るような人生を送るんだったら、もうお友だちと呼ばない」というようなことを言ったんですよ。つまり、知事をやめてその後も輝くような人生を生きなきゃだめよ…と。「ああ、そうか」と納得しましたね。確かに、ずうっと長くやっていると、知事以外できない体になってしまう。

もうひとつの伏線は、私が16年前に知事になったときに宮城県知事の前々任者であられた山本壮一郎さんにご挨拶に行ったときのことで。その山本さんが「おれは3期でやめるつもりだったが、5期もやってしまった」と、いかにも恥ずかしそうにおっしゃったんですよ。これは明らかに私に対するメッセージだったと思います。それ以来、私は3期でやめようと漠然と考えていました。そして4年前に辞めて、58歳の時に慶應義塾大学の教授に就任し、今は61歳です。たぶんもう1期務めていたら、今のように慶應義塾大学に限らず、フルタイムの仕事をやりに続ける可能性は低かっただろうと思います。

●県警の深くて暗い闇

次はもっとおどろおどろしい話です。多分聞いたことのない方がほとんどだと思いますが「犯罪捜査報償費」についてです。

仙台市民オンブズマンが犯罪捜査報償費の予算執行について、またまた情報開示請求をしてきました。これは犯罪などが起こった時に、各部門の捜査員が情報提供者に対して謝礼として1万円程度を手渡すものです。実際には喫茶店や公園、路上などで協力者に渡すらしいのですが、その年間金額が何千万という予算でした。

オンブズマンは、今度は知事を被告として情報開示請求の訴訟を提起してきたので、政策調整官を使って調べさせました。調査に対して県警の各担当者は親切に教えてくれましたが、私は実際にその予算を執行している人から直接話を聞くことを求めた。すると態度が豹変したんです。私は何かを探ろうという下心があったわけではなく、単に現場担当者の苦労話も聞きたいなあと思っただけでした。けれども県警側は「だめだ」と。さらに、その理由が「捜査員の士気が下がる」というのだから驚きましたね。

とは言え、さらにいろいろ話を聞いていくと、おかしいことが起きてきました。別に疑いから始めたわけではありませんでしたが、…何だか変だぞ！と。そのプロセスはまるで複雑なパズルを1つずつ組み立てていくようでした。そして最後の1ピース、これをぼんとはめた瞬間、パズルの全貌がバーッと解けたんです。それは何か？ 「実は協力者はいなかった」というピースでした。そこから「犯罪捜査報償費は使われていない」という言葉を代入すると、疑問点がポンポンと解けた。だから、現場の捜査員に直接話を聞くことなんて絶対にできなかったわけです。

私がパズルの最後の1ピースを確信できたのは、いわゆる「本物のにせ札」を見たからです。それは、警察OBが匿名で某新聞に内部告発の手紙を出したことが発端だった。たまたま、その人物を割り出してくれた人がいて、それをもとに、私は彼の家に押しかけて行きました。そして「あなたは、自分が警察を辞めたら大事件がうやむやになってしまう。それではいけないと思ったから内部告発したのでしょうか」と説得して、彼が自宅に隠し持っていた、いわゆる「本物のにせ札」を見せてもらったわけです。

その「にせ札」というか、裏金づくりはこういうことでした。つまり、うそを書くわけです。事件も協力者もでっち上げて、何万円と請求するわけです。その上、もし監査で調べられたときのために、贋ストーリーも用意しておく。警察OBの彼は、そのストーリー23件が一覧になっている資料、すなわち「本物のにせ札」を持っていたというわけです。そして「知事、これは99%うそです」と言って、私に手渡してきました。「99%」という表現は彼の最後のてらいですね。今は私がその「本物のにせ札」を持っています。

裏で「本物のにせ札」を握りながら、それでも表では現場の捜査員と話をさせてくださいと、協力者に対する資料を見せてくださいと交渉し続けました。しかし警察側は最後まで資料を出さなかった。そこで私は、辞める年、すでに2004年度の予算が動いていたにも関わらず、自分の責任として予算執行を停止しました。面白かったのは、私がうるさく資料提出を迫るようになった頃から、予算がそれまでの2割に激減しました。私の行動は常識的には当たり前ですよ。だって、予算執行の明細がはっきりしない予算を許すことは、県民から送り込まれた知事である私の立場ではできないことです。

予算執行の停止に関しては、当時の警察庁長官から「言語道断」といわれたんです。でも実は、私

はもっと言語道断なことをしていたんですよ。現職知事として、県議会や記者会見の場で「宮城県警は裏金をつくっている」って公言していましたから…。現在、宮城県の職員は胸を張って仕事をしています。少なくともあのような不祥事はもう2度とないですよ。なぜなら、すべてをさらけ出した上に、「ごめんなさい」といって県民に金を返したから。

さて、警察の闇について、『現職警官「裏金」内部告発』という本を1冊持ってきました。元愛媛県警巡査部長の仙波敏郎さんの著書です。巡査部長というのは、確か下から2番目の階級です。仙波さんは21歳の時に同期トップで巡査部長になったにも関わらず、それ以降30何年間ずうっと巡査部長でした。なぜか。彼は、若い頃「にせ領収書」を書くのを拒否したんです。上司に「にせ領収書を書かなかつたら一生昇進できない。いいか」といわれても、「いいです」といって拒否した。彼はむしろ巡査部長という階級で居続けることに誇りを持っていたのだらうと思います。

その仙波さんは、辞める3年ぐらい前に顔をさらして、愛媛県警では裏金をつくっていますという内部告発をやった。この行為に対して愛媛県警は、彼が自殺のおそれがあるからといって拳銃を取り上げ、さらに窓もない部屋の職務に配置がえして、500日以上何にも仕事をさせずにそこに居させた。彼はこの仕打ちを甘んじて受けただけでも、人事委員会に不当な配転だと裁判を起こして勝ちました。その後、訴訟も起こして勝っています。これだけひどいことをされていながら損害賠償はたったの100万円ですよ。その100万円を、愛媛県警の人が廊下で渡そうとしたのを彼は拒否して、謝ってほしいと言ったそうです。

内部告発者というのは、変わり者とかすね者と言われるけれども、仙波さんは決して変わり者ではありません。鉄道警察隊にいるときに仙波さんは、通学途中に高校生にいじめられていた自閉症の青年の話聞いて、わざわざ高校に乗り込んでいって「絶対やめさせてくれ」と学校側と直接談判した。それだけでなく見回りも行った。この青年はそれを恩に感じていて、仙波さんが定年退職するときに似顔絵と色紙を贈ったそうです。このように彼は本当に勇気のある正義の人なのです。一方の愛媛県警、何たることか。あれだけの仕打ちをされたら普通の人なら辞めてしまうけれど、彼は筋を曲げずに最後まで自分の行動を貫き通した。辞めないで居続けるほうが、よっぽど辛かったでしょう。退職のとき、愛媛警察は冷たかったそうですが、松山市民とかほかの人たちが何十人も彼を囲んで、花束を渡すんですよ。仙波さんも涙涙で、見ている私も涙涙ということ。

以上が知事時代の話です。一番の問題は、私がやったようなことをなぜ他の知事や議員がやらないか、です。それは正義感が私より弱いということではないでしょう。政治家に限らず、世の中も、警察も、また私たちも、叩けばどこかしら埃はでてくるものだと思います。ところが、同じ問題や違反をしていても、捕まる人と捕まらない人がいる。捕まらない人というのは多分警察とお友だち、捕まる人は日頃から警察に目をつけられている人。だったら、お友だちでいたほうがいいよね、というのが一般的なのです。警察はそんなことは絶対してないと言うだろうし、本当にしてないかもしれませんが。しかし、こちらがそのように認識しているということこそが権力なのです。警察側もこの「権力の恣意性」は十分認識しているようでしょう。

浅野史郎という知事は、確かに性格的にも変わり者的な部分はあるにしても、政治と金という点に関しては、そもそも選挙の始まりからクリアでなければならないという使命を負っていた。そしてその気持ちを任期中もち続けて実行した珍しい存在なのかもしれませんね。ご清聴ありがとうございました。 以上

2009年度第2回物学研究会レポート

「走りながら考え続けたこと」

浅野史郎 氏

(慶応義塾大学教授、前宮城県知事)

写真・図版提供

01；物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2009 BUTSUGAKU Research Institute.